

「許」と「赦」

カトリック教会の宝の一つが「ゆるしの秘跡」である。

「許可のきよ」許（キヨ、ユルシ） 願いを聞きいれる、おおよその数量を表す。

「恩赦のしゃ」赦（シャ、ユルス） 罪や過ちを咎めずゆるすこと。

福音書全体を通して罪人であることの幸いが語られている。

*ルカ福音書 19:3-7 「ザアカイ」

ルカ福音書 7:37 「罪の女」

神は、ご自分の似姿として人を創り、愛された。その親密な愛の関係が人祖アダムとイブの違反で壊されて、罪が人間の世界に入ってしまった。神は、元の人類との愛の関係を取り戻すために、御子イエスをこの世にお遣わしになった。イエスは、御父のこの深い愛のご計画実現のために、人となり、貧困や孤独、裏切りなどを体験されたが、どんなときにも人を赦し、ついには、全人類の罪を購うために、十字架上で命まで捧げられたのである。

イエスのこの究極の愛の犠牲によって、人類は罪から解放され、神の無限の愛をいただいた。

イエスは、死に打ち勝って復活し、今もわたしたちと共に生き、私たちの罪を何度でも許して下さっている。その具体的なゆるしの一つが「ゆるしの秘跡」。

「ゆるしの秘跡」は、イエスとの交わりを深めていただく場

「わたしは誰であるか」イエスと一緒に見せていただく場

ルカ福音記者は、「善き羊飼い」や「放蕩息子」の物語で、とくにこの神の憐れみの姿を語っている。罪を罪人の改心は神さまにとっては大きなお祝いなのです。

2. 罪とは何か。

創世記 2:16-17, 25, 3:4-10

「16 主なる神は人に命じて言われた。『園のすべての木から取って食べなさい。17 ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。』…

25 人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。……

3:4 蛇は女に言った。『決して死ぬことはない。5 それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神は御存じなのだ。』6 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。7 二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。8 その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の中に隠れると、9 主なる神はアダムを呼ばれた。『どこにいるのか。』10 彼は答えた。『あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。』

善悪の知識の実を食べるということは、「何が善で何が悪かを自分が決めて、自分が裁く」ということの始まりである。これは、人間の傲慢の極致で、その結果は人格の破壊である。

「わたしにとっての良い・悪い」は「的を外れ」である。

つまり、創世記が語る罪の本質とは、**的(神)を外れる、神から離れる**ということである。

3. 福音書に見る罪と赦し

イエスの罪人に対する態度は憐れみそのものであり、ルカ福音記者は神の憐れみを聖書の中心においている。罪が悪であることは誰でも知っていることであり、大切なことは、罪の状態から立ち上がるよう助けることである。

◇ 姦通の現場で捕らえられた女 (ヨハネ 8 : 1-11)

「自分は罪を犯したことがないと思っている人がいたら石を投げよ。」イエスの意表を突く発言によって人に向かっていた思いが逆転します。

教皇フランシスコの言葉

「わたしは罪人です。これがより正確な定義です。ただ単なる言葉のあやでも、文学的表現でもありません。わたしは罪人です」

4. 罪のゆるし (マタイ 9 : 13)

「わたしは正しい人を招くためではなく、罪びとを招くために来た。」

キリスト教の本質的な教えは、イエスの死と復活、そして聖霊の到来のおかげで、人間の一切の罪がゆるされるということにある。

a 最初の「ゆるし」である洗礼。

洗礼と赦しの秘跡は密接につながっており、最初に受ける赦しが洗礼による赦しである。

b 闘いは続く

洗礼の後も「悪への傾き」は残っていて、弱い意志のまま誘惑にさらされていることも事実である。

わたしたちを罪に誘う悪の力は恐ろしいものである。

c 「罪のゆるし」は、罪の状態つまり、的外れの状態から**的である神に立ち戻る**ことである。

「わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている」(ロマ7:19)

このような矛盾を自分の中に抱え、神のみ心にそっていないと思いながら生きています。その失った調和を取り戻し、共同体とも和解する道が回心と赦しの道で、ゆるしは新しい歩みの第一歩である。

5 ゆるしの秘跡

赦しの秘跡はイエスとの交わりを深めていただく場。

わたしは誰であるか、イエスと一緒に見せていただく場。

6 「ゆるしの秘跡」の恵み

秘跡というのは、目に見えない神さまの恵みが見える形であらわされたもので、赦しの秘跡の場合、罪を告白するという目に見える形で、神さまの憐れみによって私たちの罪が赦され、キリストとの一致に招かれる恵みである。

司祭に告白をして和解する方式は、6～9世紀、アイルランドにおいてが発達し、西ヨーロッパに広がってラテン教会で普通のこととなり今日に至っている。

「大罪」と「小罪」

➤ 「大罪」は、神さまに背くと知りながら、自分勝手な道を歩み、**神との関係を決定的に断ち切ってしまう罪**です。

思い、ことば、行い、怠りによって、愛に反する根本決断をした人の心に聖霊は宿ることができない。人を徹底的に憎んで相手の滅びを望むことや、人の幸せを不当に壊してしまうことなども大罪。

➤ 「小罪」とは「日常の罪」とも言われ、完全に神さまに背いて離れてしまったわけではないが、甘えで自分の好みを優先させているような状態である。

6. 「ゆるしの秘跡」の実際

ゆるしの秘跡は、自分の罪を認めて痛悔し、神の赦しに信頼して告白すること。この小さな告白という出来事の中に、尽きることのない赦しという真実があることを悟るなら、罪の赦しという体験は素晴らしい喜びと希望の体験となる。

1) 準備の祈り まずこれまでに頂いた恵みを感謝し、自分の罪に気付くために聖霊の助けを願う。

2) 良心の糾明（振り返り）これが第一歩。

自分の過去を振り返り、私たちの生き方の中に神に向かう歩みからの外的を外し、自分を神から遠ざけるものを見つめる。自分の中のどのような束縛があって自由を失い、善から離れたかに注目すること。

3) 悔い改め（痛悔）

これはゆるしの秘跡の中で大切なところ。神の呼びかけ、あるいは回心の恵みに対する応えである。

自分の罪の根源になっているものは何か？これが見えてこない、同じことの繰り返しになる。

4) 罪の告白

キリストの代理者である司祭に1対1で告白し罪を許してもらおう。自分のダメな部分、隠しておきたいことを神父の前で言葉にするのですから、恥ずかしさや抵抗がある。でも、「恥ずかしさ」は「聖なる恥ずかしさ」で良いしるし。告白の時感じる「悲しみ」も「良い悲しみ」。自分の弱さの傾向が見え、うまくいかなかった事柄の糸口が見えてくる。後で平安な気持ちさわやかな気持ちを味わう。

5) 司祭の指導は不可欠な要素ではないが有益なことである。

赦しが機械的にならないよう、司祭の指導や助言が大いに助けになる。司祭と告白者のコミュニケーションは正直で、開かれたものであることが大切。告白の場所も対話のために考える必要がある。

6) 罪のゆるし — 「わたしは、父と子と聖霊のみ名によって、あなたの罪をゆるします。」

この秘跡の中で最も大事なしるしである。神の赦しが教会の中で、司祭を通して、目に見える形で与えられる。司祭は、神の代理者、仲介者として私たちに赦してくださる。もう過去から自由になったという申し渡しの時である。

赦しは十字架の恵みによって、キリストの愛によって赦されることを忘れないようにしよう。

私たちは、皆同じ“赦された罪人”である。つまり、神と「和解」した「新しい人」になるということである。神の赦しは常に与えられているが、この場で、この言葉で、目に見える、耳に聞こえる具体的な形で伝わって、本当に許された解放感と喜びを味わう。小さく閉ざされていた心が開かれて、自分自身の本来あるべき姿を取り戻すことができる。このように、「ゆるしの秘跡」を、恵みを受ける機会として理解するなら、人生に力を与えてくれる大切な宝となる。

7) 償い

自分の罪を認め、痛悔し、告白してから、神に戻る道の第一歩は、まず償いである。十字架のイエスに戻り、イエスの愛によって許されたことを感謝する。償いは喜びのうちに決意を表すもので、罪の罰として受け取ってはいけない。償いは過去の傷を癒し、未来に向かった生活を改善させるものである。

{まとめ}

ゆるしの秘跡で大事なものはキリストの十字架のしるしである。十字架は神の愛がどこまで私たちに注がれているかを思い起こさせてくれる。神の愛が私たちに救い、神のあふれる恵みが中心であることを常に思い起こそう。